

8 中学部の人材ガイドブックを製作しよう

1 対象児童生徒（対象学級）の実態

中学部 聴覚障害 1年 3名
 聴覚障害 2年 3名
 重複（知的・聴覚）障害 1年 1名、3年 1名 計 8名

2 指導目標

- ① 取材活動を通じて、生徒同士の見方や人間関係の改善をめざす。
- ② 自身のコミュニケーション方法の課題を掴み、コミュニケーション手段の向上に繋げる。
- ③ 取材した内容をロイロノートにまとめることで、自らの思考を整理し、分かりやすく伝える方法や情報の伝え方を工夫できるようにする。
- ④ お互いの情報を共有することで、興味や関心の幅を広げる。
- ⑤ 紙媒体での資料、ロイロノートを学部全体の共有財産とすることで、自他の理解やコミュニケーション能力の向上につなげる。

3 取組の中心となる教科・領域等

総合的な学習の時間、学級活動、自立活動

4 使用するアプリ、周辺機器

タブレット型端末（ロイロノート）、PC、TV

5 指導の経過及び生徒の変容

	実施時期	取組みの内容
①	10/1	合同学活（生徒への課題提示「中学部人材ガイドブックをつくろう」）
②	10/1～10/31	取材活動
③	10/1～11/4	ロイロノートの使用方法の指導及び入力（各学級）
④	11/5	合同自立活動（中間報告会：取材状況の確認、質疑応答）
⑤	11/13	合同総合学習（知的グループの作業学習を追体験しよう）
⑥	11/6～11/20	再取材活動 自立活動・総合学習 ロイロノートへのデータ入力（各学級）
⑦	12/3	合同自立活動 中学部人材ガイドブック・ロイロノート制作活動の振り返り
⑧		合同総合学習 中学部人材ガイドブック・ロイロノート制作活動の振り返り
⑨	12/4～1/20	取材記録ワード入力及びロイロノート完成に向けた編集（各学級）
⑩	12/11～継続	PC日記、PCデータ入力、ローマ字入力（朝の活動）
⑪	1/22	合同総合学習（ICT活用協働学習公開授業） 中学部人材ガイドブック発表会&完成記念パーティー及びアンケート記入
⑫	2/4	学部集会でのロイロノートの発表

中学部では、異なる障害のある生徒達が共に活動していくための目的や方法を見直し、3年前から指導の改善に努めてきた。しかし、研修を重ねる中で、聴覚障害のある生徒とない生徒では感じ方や認識には大きな違いがあることが明らかになった。そこで、今年度は特に「他者理解を深め、より良い人間関係を

築く」ことに焦点をあてることにした。「共に活動」するためには、聴覚障害のある生徒達の興味・関心の幅を広げ、他者への理解を深めさせること、また思いや考えを表現し、伝え合うための力やスキル、心情を育むことが重要であると考えた。そこで、「中学部人材ガイドブック」制作という取り組み（取材活動、ワードを使った取材情報のまとめ、ロイロノートを活用したプレゼンテーション、合同授業）を通して、状況や相手に合わせたコミュニケーション手段の活用、向上、自分の今とこれからを見つめる力の伸長、互いを思いやり、認め合う心の醸成につなげていけると考え、研修を進めた。

4ヶ月間に及ぶ取り組みの中で、最初聴覚障害のある生徒達は聴覚障害のない生徒に対して積極的にかわることができず、十分な情報を引き出せずだった。しかし、何度も取材を重ねるうちに、状況や相手に合わせたコミュニケーション手段を考え、そこでのかわりに自信がもてるようになると、自ら時間を見つけて取材に取り組んでいった。また、友達の得意、不得意を知ることによって友達を気にかけてたり、困っている時に理解を示したりすることが多くなった。

取材情報のまとめの際には、自分の作成した原稿を客観的に捉えながら、読み手（受け取り手＝自分以外の他者）の気持ちを考えた文章表現、構成を意識して取り組むようになっていった。しかし、パソコンやiPadに入力していく際、それぞれの生徒の操作の頻度やレベルが大きく影響した。教育課程の関係上、ローマ字入力を伴うパソコン操作を日常的に学習している生徒としていない生徒では操作能力に大きな差があり、また家庭にパソコンがある生徒とない生徒とでも差が現れた。

そこで、中学部の廊下に3台のパソコンを設置し、朝の登校後の時間や昼休みを利用して、自由にパソコンを操作したり、入力したりする場を設け、他の障害種の生徒との交流も図るという取り組みを行った。それぞれのパソコンに実態に応じて選択できる課題（ローマ字入力、パソコン日記、PCデータ入力）を設定し、生徒は自分のレベルに応じた課題に取り組んだ。仲間と自分を比較し、できるようになりたいという意欲を喚起する場を設定したことで、普段かわりが少ない他の障害種の生徒とも新たな関係を築くことができた。また、自分の集めた情報を文字情報に置き換える際、ストレートに提示するのではなく、受け取り手に配慮しながら情報を取捨選択して提示すること、これらの情報をより分かりやすく他者に伝える方法を探り、ロイロノートやマインドマップに自分なりの工夫しながらまとめることができるようになった。また、まとめたガイドブックをお互いに見せ合い、よい点や改善点を評価しあうことで、自己肯定感を高めることもできた。聴覚障害があるが故に、これまで周囲からの情報が入りにくく、自己評価が低かった生徒も、仲間から認めてもらっていると実感できたことで、様々な不安が解消し、いろいろなことが好転し始めた。つまり、この他者理解を深めるための活動を通して、それぞれが自分の課題に気づき、自分自身と向き合う時間が増え、思いや考えを自分の言葉で言語化、行動化できるようになったといえる。

6 指導のポイント（変容の要因、効果的な支援方法）

変容の要因として、以下の6点が挙げられる。

- ①人と関わる力の向上：仲間に質問する力、仲間の答えを読み取る力、仲間を真似したいと思う力
- ②表現する力の向上：取材した内容を文章で表す力、漢字を正しく読む力、漢字を正しく書く力
自分の考えを文字や記号、イラスト等にまとめて表す力、
- ③操作する力の向上：ローマ字入力、インターネットを使って情報を集める力、自分の思いや考えを様々な機能を利用して効果的に表現する力やスキル
- ④自己認識の深化：他者と今の自分を比較し、客観的に捉え、自分自身の課題に気付く力
- ⑤他者理解と受容：互いの良さも困難さも含めて理解し、認め、受け止める力
- ⑥課題解決力の向上：自分の課題を客観的に理解し、解決のための手段や方法を収集し実行する力
- ⑦連 体 感：聴覚障害のある仲間同士、中学部の仲間同士であると感じる力

効果的な支援方法として、以下の6点が挙げられる。

①特派員カードの提示～きっかけ作り

話したことがない生徒に声をかける際、取材用特派員カードを提示することで、話のきっかけづくりができた。手話表現、指文字、書く力、読み取る力に差があるが、リラックスした状態で取材が可能になり、追加取材もスムーズに行えた。

②座席の配置～馬蹄形

教師を中心に、互いの表情や意見が確認し合えるコの字形に座席を配置した。対教師との授業というより、仲間同士での意見交換という雰囲気、素直な意見と安心感を引き出した。

③情報の可視化～ミニホワイトボードの活用

生徒達が互いの思いや考えを表現する際、これまで手話表現や指文字、口話を中心であった。しかし、この方法では手話表現力や語彙力の差から、全く違った内容として受け止められてしまったり、必要以上に時間がかかったりしていた。仲間の発表を聞き、質問や気づき、感心したこと等を各自でミニホワイトボードに記入し、「オープン」の掛け声で同時に見せ合うことで、仲間の考えていることが瞬時に把握できるようになった。また、同じ趣旨の内容を伝えるのに、いろいろな表現の仕方があることに気付くことができた。そこで、教師もまた生徒の現在の力、集団の力の可視化が可能となり、変容していく姿を実感することができた。

④可視化による課題の認識と共有

可視化した際、文字の大きさ、丁寧さ、正確さ、語彙力、文法の正確な使用、作文の苦手さ、読み書きのスピード、受け止め方の多様性、理解力の差等を、みんなが認識できた。この時、教員の意見も紛れ込ませ提示することで、正しいモデルも自然に学習できた。しかし、それで仲間を批判するのではなく、違いを受け入れることで、互いを尊重する気持ちが育った。

⑤体験活動による価値観のゆさぶり

総合的な学習の時間を利用して、準ずる教育課程の生徒に知的障がいの生徒が行う作業学習（農園作業）を体験させた。普段やったことがない活動に戸惑い、机上では味わえない様々な体験をすることで、

先輩や他のグループの仲間への敬慕の念が芽生え、自分自身を振り返るきっかけになった。

⑥人材ガイドブックを見せ合う

自分の編集したロイロノート（人材ガイドブック）を見せ合うことで、「自分も作りたい」「自分も真似したい」「もっと他に方法はないか」「こんなことはできないか」等の探究心や創作意欲をかき立てることにつながった。その結果、短期間で生徒のPCやiPadの操作能力は飛躍的に向上した。また、完成した「中学部人材ガイドブック2巻」を手にする仲間の姿が、生徒たちの喜びと達成感、そして、

新たな人間関係の芽生えにつながった。

今回の協働学習で、「共に活動する」＝「共に生きていく」ためには、互いの良さも困難さも含めて理解し、認め、受け止めることで、より良い関係を築いていけるということが実感できた。しかし、一方で聴覚障害のある生徒達の興味・関心の幅を広げ、他者への理解を深めるためには、現在の自分自身の言語力、表現力、コミュニケーション能力、関係形成能力、論理的思考力を客観的に捉え、自分自身の課題に気付く力、課題解決に向けて取り組む力がより重要であるということが分かった。つまり、他者（ここでは中学部の仲間）理解を深めるための取り組みは、同時に自己理解を深める取り組みであるということが証明された。また、生徒達が互いの思いや考えを表現する際、情報の可視化に努めたことで、教師もまた生徒の現在の力、集団の力の可視化が可能となり、変容していく姿を実感することができた。

その上で、互いを「よく知る」ために、「多様な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聞いて自分の考えを正確に伝えるとともに、自分の置かれている状況を受け止め、役割を果たしつつ他者と協力・協働して社会に参画し、今後の社会を積極的に形成できる」人間関係形成能力・社会形成能力の伸長を促すことが教師に問われてくる。積極的に人や物、社会と関わり、自分の言動、考え方、生き方に反映させることのできる生徒を育てる場を仕組んでいかねばならない。また、経験したこと、獲得した情報、心に響いた感情を整理し、社会の中で自分の関わる人間とも、目に見えない他者とも共に、自分の役割を果たすことのできる生徒を育てていかねばならない。

そのために、今回の協働学習で得られた生徒の課題を教師集団の課題と捉え、以下の6点に継続して取り組んでいきたい。

- ①障害種に関わらず、互いの良さ、困難さ、課題を認め合う集団づくりに努め、共感し合える成功体験を重ねさせること
- ②伝え合うための個々の技術（「聞くこと」「話すこと」「書くこと」「読むこと」）を引き出し、伸ばすための取り組みを継続すること及び客観的なデータを蓄積すること
- ③伝えたい思いを受け止め、手話単語、手話表現のもつ意味、使い方を正しく理解させること
- ④言語力（音韻、意味、文法、読解）を高め、活用させること
- ⑤情報を正しく取舍選択し、適切に活用できる学力、情報機器を正しく活用する力をのばすこと
- ⑥生徒の成長を互いに喜び合える、協力し合える教師集団であること